

お茶の水女子大学「スーパーグローバル大学等事業経済社会の発展を牽引する
グローバル人材育成支援」(旧グローバル人材育成推進事業)
「中間報告シンポジウム」における事業評価委員の評価内容

平成 26 年 12 月 3 日、お茶の水女子大学は「スーパーグローバル大学等事業経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」(旧グローバル人材育成推進事業)の二年半の事業実施の成果を評価し、これを公表するため、「中間報告シンポジウム」を開催し、事業担当者による実施報告と事業評価委員による中間評価を行った。事業評価委員会は、本プログラムを担当しない学内教職員と外部有識者により構成される。各委員による評価結果は下記のとおりである。

リンダ・グローブ 上智大学名誉教授

評価内容：元々グローバルな活躍に関心のない学生をどう取り込んでいくかが重要。サマープログラムや短期語学研修などに簡単に参加しやすいこと、GREAT-Ocha シンポジウムで外国人と直接的に接触が持てることなどが高く評価できる。これらが長期語学留学に向けたステップとなるのが本事業の特徴だと思われる。また、四学期制の導入により、学生が留学しやすくなったのも良い。

田嶋 眞知子 一般社団法人桜蔭会理事

評価内容：お茶大生には、目立ちたくない、また自信がなくて腰がひけている学生が多いので教員などが背中を押して欲しい。その一方で全員がグローバル人間になる必要はないので、グローバル人材育成事業に入っていかなければ遅れているという意識を持たせないよう、学生のケアをお願いしたい。また、専門の力をつけておかなければ英語を使って仕事することもできないので、専門性を持って社会に出て行くことも大事ではないか。

西田 純隆 公益財団法人常務理事

評価内容：期待以上の速さで事業が進んでおり申し分ない。附属学校との一貫性や一体感も見られる。独自の奨学金制度の創設や学習成果アセスメント・ポートフォリオのシステム化など先進的な取り組みもあり評価できる。国際性・社会交流をはじめとする本学の基本理念、これらに沿った絶え間ない努力と実績の蓄積が根底にあるからこそ着実な歩みを示していると思われる。大学で身に付けた国際性・人間性・社会性がその後のステージで活かされることが重要で、いかに学生が描くキャリアデザインと連結させ、連続性を持たせるかが大切だといえる。

吉井 淳 明治学院大学副学長

評価内容：グローバル人材育成が大学の教育という観点からすればどういう意味があるのかを考えていくことが重要である。ポートフォリオの実現は素晴らしいが、その反面学生の管理にもつながるため、学生が息苦しくならないような留意が必要だと思われる。教員のグローバル教育力を高めるという面に踏み込んだ点には期待をしている。外国の大学とのジョイントプログラムや連携については、お茶大はもっとできるのではないか。

最上 善広 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科長

評価内容：平成 24 年度から今までは事業の立ち上げの時期だった。色々なアイデアを出し、それを着実に実行していることは高く評価できる。今後ファインチューニングをしていくうえで、学生からの視点がやや不足している点には留意が必要。恩恵を受けているのは今のところ一部の学生なので、海外留学の体験談を少し腰の重い人たちに聞かせてその人たちを振り向かせることが今後の計画には必要ではないか。入学時からの行動計画を立てさせ、この時期に留学したいという夢を持たせるサポートをしてあげればより有効なグローバル人材育成ができるのではないか。

山崎 秀保 お茶の水女子大学副学長（事務総括）

評価内容：中間評価調書で事務体制のグローバル化が言及され、今後、ホームページでの英語による発信や英語ができる職員の増員も必要とされる中、国際課だけでなく各部署が情報共有して一層の連携を行うことが必要となる。他方、競争的な事業においては、産業界の要請を背景とした国のメッセージ性が強くなってきており、大学の主体性を維持しつつ、そうした要請にも応えていることを見せる目配りも必要だと思われる。